

Pink Esthetics を長期的安定とリカバリーの新法 Long-term stability of Pink Esthetics and New Methods of Recovery

Hiroyuki Takino

瀧野 裕行

医療法人 裕和会 タキノ歯科医院



審美領域におけるインプラント治療では、隣在歯との調和をはかり、左右対称性・適切な歯頸ライン・歯肉の豊隆・歯間乳頭の高さなどにおいて、健全な天然歯に見られるような自然美を再現することは容易ではない。すなわち天然歯とインプラント、相反する生物学的背景を持ち合う両者が一口腔内の中で機能的・審美的に調和を果たすためには“Pink Esthetics”への着目が重要となる。本来、口元における審美性は歯冠部の色調や形態つまり White Esthetics によって例えられがちであるが、歯肉の適正な枠組み、すなわち Pink Esthetics の確立によって初めて審美的要件が満たされることとなる。Pink Esthetics の実現には 1.Parallelism, 2.Symmetry, 3.Papilla, 4. Curvature (Zenith), 5.Color & Texture. これらの要素の確立が重要とされる。また審美領域の治療の成功には、多くのマテリアルから個々のケースにあった適正なものを選択するのは勿論のことだが、的確な診断に基づき、数多くの治療戦略の中から患者の失われた機能、審美の回復およびその治療結果の永続性が最も獲得出来るものを選択することが大切である。また、得られた審美的結果を長期的に維持安定するためには、清掃性の良い補綴物の形態の付与、あるいは理想的な位置へのインプラントの埋入が必要となる。さらに上顎前歯部は、解剖学的に唇側歯槽骨が薄く、抜歯による歯槽堤の吸収が大きいいため多くの症例において適切な位置への埋入が困難となり、硬・軟組織の増大が必要となる。しかしそれらは硬組織の再生量や軟組織の退縮、歯間乳頭の喪失など、予測通りの治療結果とならないことも多く、時には術者の意に反して不可逆的なダメージを受けることも考えられる。

今回、“Pink Esthetics”をテーマに、外科的難易度・手法の異なった症例を長期的観点から検証する

【略歴】

- 1991年 朝日大学歯学部卒業
- 1995年 タキノ歯科医院開設
- 2006年 医療法人 裕和会開設
- 朝日大学歯学部 客員教授（歯周病学講座）
- JIADS 理事
- 日本臨床歯周病学会 認定医
- 日本審美歯科学会 認定医